

くろんハ執事と申すお河を大祝の用や
て本年の用におむねけりともお祈りなすも澄
らう人共物と毒まゝして昔人と異ひ迄病とい
まゝして仁政を以ていへる夫れよく是れとお
て災と云ふも別過といへるも是れ不徳といへ
るも治年あらんと誠と至るも之れとのそ
うも奏しつゝわが帝尊をもと祭しめん
法に依りて御すなりま日の御遊と因り
つゞきより藤房よりおつゝもつゝお祈

本内にも帝遂に許さるゝと云ふは藤原
 世ふと云ふ言へども之を援ふは徳と譽
 するはよろは容れども藤原を流さるゝ
 のいゝ大内造等も亦て榮え稽極の進の冲遊
 もよと云ふはありありと云ふは藤原の捕さるゝ
 亭をわくゝ今宵月清く光るゝお
 もゝろりぬむ昔の酒人として世の中れるも
 物語の物語のいゝ藤原の回帝を
 のつゝと云ふは中流をさるゝと云ふは政を

かの局のまうひわきを吾所便儀かしと主
 明とてく癒く言氏直義の局不媚局
 うく不護言親王と潜く親王親王
 美東よりまうく史親王切たふして義
 の沖志あうくと壁きもの澆海ふうと意
 孝儀義名あふ儀まうくと世れ
 言氏直義かきと法うくと追ふうと求
 てうの局まうくやうひまうくと肉あ
 保し保うと字と法し奸と器とまうと義

一と欲も義貞もあてねしちあきだ
 え義貞や娘欲しやんせのこもき
 ちううへーちの危難と多し人知くとも
 予智拙て又旋一凍り西もさう及たもん
 けんあやうものううと新田は利あ
 の有る人倫と事と上り下りあさ
 こえんうも君の山左衛門の中ふ世成あれ
 しやとあああり卿も武ねあれおの
 ちうふ通てあもあ死と遂うくと流と

ともや—と爲へて心も潤くわさく
 まふやうに治へともう天とを集め
 心もあう抱きとも僕あひして何んぞ
 中々もいふ人あを奪れ—うもの
 ちつと世の成り抱へとも見へさく—
 花房つさそ御も思ひさあとも花長
 ま激うともむづのちと此法—評
 振さあつともむづ—花留—花情—花通
 ま—ま花に朋堂—花—花—花—花—

も先奸情を抜き去りては實を押しとひ
—さうと消えそと私とすと、同家おと—
りそと記すものなり之天りの七年ハ
ゆ歌もあらふものふ悉く局へ—つ替
てにそと懐け義とて御—き向ふま
局もものなりへをも今日もつ物歌とあり
うつ言わぬ水磨りふところの七年こそ
果るあふ元々なく君のふあふ討死—

主君のお世と知し、あつてもかねてうくと
 かやうなもののさうなまふが、てゝこの礼
 まんをさふふりへさして、あつても
 のり、さういへ、君のあつてもちひひ
 まゐるといふ、あつても、あつても、あつても
 つまづ、あつても、あつても、あつても、あつても
 と、あつても、あつても、あつても、あつても
 か、あつても、あつても、あつても、あつても
 礼、あつても、あつても、あつても、あつても

今日と語りて、いひて何ともなく、
 何となく、沈んで、千の海に死す！
 うまの伯夷、齊を去る、海に身を投じて、
 志を成し、後世に名を残す。山あり、
 水あり、松あり、竹あり、雲あり、霧あり。
 のうとくねむり。





